

大学生が有効であると評価する手段と目標志向性の関連

—制御焦点の観点から—

三和秀平^{1,2} 長峯聖人^{1,3}・湯立^{1,4}・海沼亮^{1,5}・外山美樹^{1,6}

1. 教育テスト研究センター 2. 信州大学 3. 東海学園大学
4. 東京成徳大学 5. 松本大学 6. 筑波大学

本研究では大学生が目標志向性に合った手段を有効であると評価するかを検証した。大学生 75 名を対象に調査を行い、促進焦点、防止焦点の特徴を有した架空の人物に対して、熱望的な手段または警戒的な手段のどちらが有効であるか評価を求めた。その結果、速さ / 正確さの重視、フィードバック、役割モデルでは個人の特性に関係なく特定的手段が有効であると判断する者と、目標志向性に合った手段を有効であると評価する者が多くみられた。一方で、マイクロ / マクロ方略では違いはみられなかった。また、従来の研究でみられていた促進焦点的な状況や手段が有効であるとされる傾向は確認されなかった。

キーワード 制御焦点, 制御適合, 手段, 大学生, 有効性

1. 問題と目的

Higgins (2000) の制御適合理論では、目標志向性にあった手段の使用により、動機づけやパフォーマンスの向上がみられると考えられている。この理論では、目標志向性を利得の存在への接近や利得の不在からの回避を目指す促進焦点と、損失の存在からの回避や損失の不在への接近を目指す防止焦点に区別している。そして、促進焦点の個人は、マクロ方略の使用 (外山他, 2017a)、速さの重視 (外山他, 2017b)、ポジティブなフィードバック (Idson & Higgins, 2000)、ポジティブな役割モデルの提示 (Lockwood et al., 2002) などの熱望的な手段によって、防止焦点の個人はマイクロ方略の使用、正確さの重視、ネガティブなフィードバック、ネガティブな役割モデルの提示などの警戒的な手段によって、それぞれ動機づけやパフォーマンスが向上することが示されている (レビューとして、外山, 2021)。

また、Scholer & Miele (2016) は人が目標志向性に合った状況や手段を効果的であると認識する傾向や促進焦点的な手段や状況の有効性を高く認識する傾向を示している。しかしながら、学業場面において目標志向性に合った手段の有効性が高く評価されるのか、また先行研究のように促進焦点的な方略の有効性が高く評価されるのかは定かではない。実際に、学習者は必ずしも効果的であるとされる方略を使用していないことが指摘されている (吉田・村山, 2013)。そこで本研究では、大学生を対象に促進焦点 / 防止焦点の特徴を有した架空の人物に対してどのような手段が有効であると評価されるのかを検証する。

2. 手段

2. 1 調査協力者および回答の手続き

大学 1 年生から 3 年生の 75 名を対象に調査を実施した。調査は大学の講義の後に行われた。画面上に QR コードを提示し、Google form による web 調査の形式で実施した。調査の際には、回答は自由であること、成績には関係ないことなど倫理的な配慮について説明をした上で実施し、回答をもって同意したこととみなした。

2. 2 調査の内容

下記の A さん、B さんの情報を提示し、それぞれに対して促進焦点的な手段 (以下、熱

望的な手段)と防止焦点的な手段(以下、警戒的な手段)のどちらが有効であると思うか、いずれか一方の選択を求めた(教示や手段はTable 1参照)。

Aさん(促進焦点) 大学生のAさんは成功を目指して頑張るタイプです。普段から、どうやったら自分の目標を達成できるかや、利益を得ることができるか、理想に近づくことができるのかなどをよく考えています。大学の試験でもよい成績を取りたいと思い、普段から勉強に励んでいます。

Bさん(防止焦点) 大学生のBさんは失敗しないことを目指して頑張るタイプです。普段から、どうやったら悪い出来事を避けることができるかや、損失を回避できるか、義務や責任を果たすことができるのかをよく考えています。大学の試験でも悪い成績を取りたくないと思い、普段から勉強に励んでいます。

Table 1 教示と方法

教示	熱望的な手段	警戒的な手段
マクロ・ミクロ方略 Aさん/Bさんが期末試験において良い成績を残すためには、どちらの方法が有効であると思いますか	マクロ方略 細かいことを覚えるよりも、おおざっぱな内容を把握する	ミクロ方略 全体を理解する前に、重要な用語や語句を理解する
速さ / 正確さ Aさん/Bさんが速さと正確さが両方求められる課題において良い成績を残すためには、どちらの方法が有効であると思いますか	速さ重視 速さを重視する	正確さ重視 正確さを重視する
ポジティブ / ネガティブフィードバック 試験が終わり、次の試験に向けて勉強をするとき、Aさん/Bさんが次の試験で良い成績をとるためには、前の試験についてどちらのフィードバックを受けることが有効であると思いますか	ポジFB 前の試験で良かった点に関するフィードバック	ネガFB 前の試験で悪かった点に関するフィードバック
ポジティブ / ネガティブ役割モデル Aさん/Bさんが試験で良い成績を残すためには、どちらの人と自分を比べることが有効であると思いますか	ポジモデル 良い成績を取り、成功している人物	ネガモデル 悪い成績を取り、失敗している人物

注1) ポジFBはポジティブフィードバック、ネガFBはネガティブフィードバックを表す

注2) ポジモデルはポジティブ役割モデル、ネガモデルはネガティブ役割モデルを表す

3. 結果と考察

促進焦点、防止焦点のそれぞれの人物に対して手段が有効であると選択した人数をTable 2から5に示した。なお、促進(Aさん) / 防止(Bさん)焦点ともに警戒的な手段が有効であったとしたもの(左上のセル)を警戒群、促進 / 防止焦点ともに熱望的な方略が有効であったとしたもの(右下のセル)を熱望群、促進焦点には熱望的な手段、防止焦点には警戒的な手段が有効であったとしたもの(右上のセル)を適合群、促進焦点には警戒的な手段、防止焦点には熱望的な手段が有効であったとしたもの(左下のセル)を非適合群とする。

頻度に差がみられるのかを検証するために、1×4のカイ二乗検定を行った。その結果、マクロ / ミクロ方略では有意な偏りはみられなかった($\chi^2(3)=7.08, p=.07$)。速さ / 正確さ($\chi^2(3)=49.43, p<.01$)では有意な偏りがみられ、多重比較の結果、警戒群($n=42$)が一番多く、次いで適合群($n=22$)が多かった。非適合群($n=2$)、熱望群($n=9$)には差はみられなかった。ポジティブ / ネガティブフィードバック($\chi^2(3)=41.11, p<.01$)では有意な偏りがみられ、警戒群($n=39$)および適合群($n=24$)が、非適合群($n=8$)および熱望群($n=4$)よりも多かった。ポジティブ / ネガティブ役割モデル($\chi^2(3)=43.67, p<.01$)では有意な偏りがみられ、熱望群($n=35$)および適合群($n=30$)が多く、次いで非適合群($n=10$)が多かった。警戒群($n=0$)はいなかった。

マクロ / ミクロ方略を除きいずれも偏りがみられ、目標志向性に関係なく両者ともに特定の手段が有効であると評価する者が多く、多くの大学生は個人の特性に関係なく手段が有効であるのかどうか評価する傾向にあることが示された。また、先行研究においては促

進焦点的な状況や方略が有効であるとされる傾向がみられるが (Scholer & Miele, 2016), 本研究ではその傾向はみられなかった。どちらの手段が有効であると評価されるかは、使用する手段や文脈にも依存することが考えられる。例えば、今回想定したフィードバックでは、良かった / 悪かった点に関するいずれかフィードバックの選択を求めたが、良かった点に関するものは動機づけの向上にはつながるかもしれないが、直接的に成績を向上させるものではない。一方で、悪かった点に関するフィードバックはそこを修正することにより成績の向上が期待できる。手段の選択は個人に適合するだけでなく、課題との相性が重要視されるのかもしれない。マクロ / ミクロ理解に関しては違いがみられなかったが、これらの手段の適合によるパフォーマンスの向上はテストの種類によって効果が異なることも示されており (外山他, 2017), 課題の特徴によって判断が異なることが考えられる。

加えて、制御焦点理論の考えに沿い、促進焦点には熱望的な手段が、防止焦点には警戒的な手段がそれぞれ有効であると認識している適合群も多くみられ、一部においては先行研究で示されたように、目標志向性に合った手段が有効であると認識している傾向も示された。今後は、制御焦点に合った方略の有効性を認識している者の特徴などを検討する必要があるだろう。また、知識を有していても実際に使用できるかどうかはわからない。自身に合った方略の有効性を認知しているか、また実際に使用できるかも検討の余地がある。

Table 2 マクロ/ミクロ方略

		促進	
		マクロ	ミクロ
防	マクロ	17	27
止	ミクロ	20	11

Table 4 ポジティブ/ネガティブフィードバック

		促進	
		ネガFB	ポジFB
防	ネガFB	39	24
止	ポジFB	8	4

Table 3 速さ/正確さ

		促進	
		正確さ重視	速さ重視
防	正確さ重視	42	22
止	速さ重視	9	2

Table 5 ポジティブ/ネガティブ役割モデル

		促進	
		ネガモデル	ポジモデル
防	ネガモデル	0	30
止	ポジモデル	10	35

注)すべての Table において、数値は手段を有効であると選択した人数を指す

参考文献

- Higgins, E. T. (2000). Making a good decision: Value from fit. *American Psychologist*, 55, 1217-1230.
- Idson, L. C., & Higgins, E.T. (2000). How current feedback and chronic effectiveness influence motivation: Everything to gain versus everything to lose. *European Journal of Social Psychology*, 30, 538-592.
- Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 854-864.
- Scholer, A. A., & Miele, D. B. (2016). The role of metamotivation in creating task-motivation fit. *Motivation Science*, 2, 171-197.
- 外山美樹(2021). 制御適合とパフォーマンスに関する研究の動向と今後の展望 教育テスト研究センター年報, 6: 21-39.
- 外山美樹・長峯聖人・湯立・三和秀平・黒住 嶺・相川 充 (2017a). 制御焦点が学業パフォーマンスに及ぼす影響—制御適合の観点から 教育心理学研究, 65: 477-488.
- 外山美樹・長峯聖人・湯立・三和秀平・黒住 嶺・相川 充 (2017b). 制御適合はパフォーマンスを高めるのか?—制御適合の種類別の検討 心理学研究, 88: 274-280.
- 吉田寿夫・村山 航 (2013). なぜ学習者は専門家が学習に有効だと考えている方略を必ずしも使用しないのか—各学習者内での方略間変動に着目した検討 教育心理学研究, 61: 32-43.

